第６学年　社会科学習指導案

１　単元名　　災害を経験した人々のくらしとこれからのわたしたち

２　単元の目標

・近年あった震災や安城市の地震対策について主体的に調べようとしたり、学習したことを社会生活に生かそうとしたりすることができる。（社会的事象への関心・意欲・態度）

・震災に関する安城市の役割やそれに対する市民の願い、地域の取り組みに着目する中で、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けてどのように社会と関わるべきか自分なりの考えをもち、それを説明したり、議論したりすることができる。（社会的な思考・判断・表現）

・安城市の家計簿や安城市地震対策アクションプランなどを用いて、地域の防災対策について調べる中で、問題解決に向けて情報を取捨選択し、自分の考えに生かすことができる。（観察・資料活用の技能）

・震災に関する市や県、国の取り組みを通して、政治は国民生活の安定と向上を図るために大切な働きをしていることを理解できる。（社会的事象についての知識・理解）

３　単元について

（１）　めざす子どもの姿

【６年１組】

６年生では、１学期の社会科の授業で行った「３人の武将と天下統一」では、織田信長が行った政策に対して、資料から読み取りを行った。しかし、児童は、資料から読み取ったことよりもこれまでの経験で知っていることや想像したことを発言することが多く見られた。また、資料に載っていることをそのまま写し、異なる資料と資料から読み取ったことを関連付けて考えることができた児童は少なかった。

そこで、本単元では、グループ活動に重点を置き、話し合いを通して、個々が資料から読み取ったことを出し合い、それらを関連付けていく。その中で、考えを構築し、考えを深められるようになってほしい。さらに社会に生きる一人として、身近な問題として、震災時における公共団体の役割や課題から、自分たちにできることは何かを主体的に考えられる姿に期待したい。

【６年３組】

１学期の社会科の授業で行った「３人の武将と天下統一」では、３人の中から好きな武将を選び調べ学習を行った。意欲的に活動する姿が見られた一方で、必要な資料を取捨選択することができなかった児童も多くいた。そのため、その後の話し合いでは自分の考えに対する根拠に自信をもつことができず、発言する児童が一部に偏ってしまった。

そこで、今回の実践ではグループ活動に重点を置き、一緒に調べ学習をしたり、考えが似た児童と話ができる場を設定したりして、一人ひとりが自分の考えに自信をもつことができるようにしたい。自信をもつことで、自分の考えを伝えようと意欲的に話し合いに参加したり、考えを深めたりすることができると考える。地震対策について話し合いを通して、安城市にどのような課題があるのか、自分たちにはどのようなことができるのか、主体的に考えていく態度を育んでいきたい。

（２）教材の価値

近い将来発生すると予測されている南海トラフ地震は、私たちが住んでいる安城市でも大きな被害があると予測されている。安城市地震ハザードマップの建物の全壊・焼失率図を見ると、安城中

部小学区は３０パーセントを超えている場所が多くある。そのため、安城市地震対策アクションプランや安城市地域防災計画など市ではさまざまな対策をとっている。しかし、市民のアンケート結果を見ると、市の取り組みに意欲的に参加している人はとても少ない。また、児童の避難訓練の取り組みを見ていても、あまり切迫感は感じられずどこか他人事のようである。

そこで、単元の導入で起震車を利用して実際の揺れを体験し、児童の意欲付けを図る。続いて、今もまだ復興作業が続いている東日本大震災をはじめ、児童の関心の高い歴史的建造物である熊本城が崩れてしまった熊本地震、寒い地域ならではの苦労があった北海道胆振東部地震を取り上げ調べることで、大地震が来るにあたりどのような課題があるのか自分事として捉えることができると考える。さらに、復興に向けての取り組みを調べていく中で、市や県、国が連携して市民を助けてくれていることに気付かせていきたい。

また、前単元で学習した税金と関連させたり、東日本大震災復興に関する市民の願いを知ったりすることで、私たちのくらしと政治がどのように関わっているのか考えを深めていきたい。震災に対する取り組みについて調べたり話し合ったりする中で、市の取り組みをより多くの人に広めたり、参加したりしていこうとする地域住民としての自覚と、社会へ主体的に関わろうとする姿に期待したい。

（３）指導の手立て

①　児童の興味関心に合わせて、話し合いのグループ構成を変えていく

同じ地域に住んでいたり、似たような考えをもっていたりする児童でグループを構成して話し合うことで、一人ひとりが安心して意見を言うことができるように場を設定する。そうすることで、全体で意見を交流させたときに、自分とは違った意見があることに気付き、より考えを深められるようにする。

②　より身近な問題として捉えるために、安城市危機管理課の方を招く

一人ひとりがより自分事として捉えることができるようにするために、単元の要となるところで、安城市危機管理課の方を招く。そこで現状を聞いたり、児童の考えを伝えたりする場を設けることで、社会参画の意識を高められるようにする。また、安城市危機管理課を通して起震車で揺れを体験する活動を取り入れることで、切実感を持たせたい。

③　意見の根拠として資料を活用するために、タブレットを利用する

自分の意見に自信をもたせるための手立ての一つとして、根拠となる資料を活用できるようにする。資料をタブレットで写真を撮り、ためておくことで、取捨選択が苦手な児童でも必要な分だけを簡単に活用することができるようにする。

（４）単元構想図

学習内容・児童の思考	学びをつなげていくための手立て
地震を体験しよう① ・すごく大きな音がしてとても怖かったよ。 ・こんな地震が来たら絶対に家も壊れてしまうよ。 ・私たちが住んでいる町にも大きな地震がくるみたいだけど、大丈夫なのかな。	・南海トラフ地震では、どれくらいの揺れが起こるのか切実感をもたせるために、起震車で揺れを体験する。（手立て②）

もしも南海トラフ地震が来たらどうなるか話し合おう② ・私はマンションに住んでいるよ。壊れてしまうのかな。 ・駅の近くに住んでいるから電車がどうなるか心配だよ。 ・ハザードマップを見ると、この辺りは全壊・焼失率が高いよ。ぼくの家もなくなってしまうのかな。 ・平日の昼に来たら、家族と会うことができるのか心配だよ。 ・避難所生活はどんな感じなのかな。食べ物はあるのかな。 ・停電したらどうしよう。何日で復旧するのかな。 ・大きな地震があった地域はどう対応していたのかな。	・自分たちの住んでいる町の課題に気付くことができるようにするために、ハザードマップや地域の人の意見をもとに話し合いをする。 ・共感しながら話し合いを進めることができるようにするために、住んでいる場所の近い児童でグループをつくる。（手立て①） ・次時につなげるために、「だれが助けてくれるのかな」と考えを深める問いかけをする。
震災の被害を受けた地域について知ろう③④⑤ ・今もまだ仮設住宅で暮らしている人がいるよ。 ・熊本城が完全に復旧するのは２０３７年みたいだよ。 ・市民が必要としているものを聞いて、それをもとに市や県は動いているんだね。 ・市や県の申請を受けて、国が法律をつくったり、予算を用意したりしているよ。 ・私たちが住んでいる町にはどのような対策があるのかな。	・震災復興には市民の願いをもとに市や県、国が協力して動いていることに気付くことができるようにするために、３つのグループ（東日本、熊本、北海道）に分かれて調べる時間を設ける。（手立て①） ・国からの要請で安城市も活動したことを知るために、安城市危機管理課の人を招く。（手立て②）
南海トラフ地震に対する取り組みについて考えよう⑥⑦ ・安城市地域防災計画があるよ。国に連絡を取るんだね。 ・市の予算は３パーセントだったね。それで何ができるのかな。 ・町には、自主防災組織があるよ。 ・東日本大震災を受けて、県もさまざまな取り組みをしているよ。 ・市が用意している備蓄食で本当に足りるのかな。 ・安城市地震対策アクションプランのアンケート結果を見ると、取り組みについて知っていても、やらない人、参加しない人がたくさんいるね。	・さまざまな取り組みについてより詳しく調べるために、町、市、県のグループに分かれて調べ学習を行う。（手立て①） ・町、市、県の取り組みを理解した上で、より切実感をもって学習に取り組むことができるようにするために、市の取り組みに焦点をあてて課題を考える。
安城市の取り組みに対する課題、疑問を追究しよう⑧⑨【３組本時⑨】 ・備蓄食を増やしてほしいという人が多いけれど、場所などの確保ができるのかな。自分で用意することも大切だよ。 ・家具転倒防止に取り組んでいる人は少なくて、やり方を知りたい人も多いからそういうイベントがあるといいね。 ・自分たちでできることは何があるか考えてみたいね。	・意欲的に学習に取り組むために、前時に興味をもった疑問に対してグループで調べ学習を行う。（手立て①） ・市民の意識に課題があることに気付くことができるようにするために、話し合いを取り入れる。
南海トラフ地震に備えて自分たちにできることは何か話し合おう⑩⑪⑫【1組本時⑪】 ・地域の避難訓練に積極的に参加してみよう。 ・安城中部小学区のハザードマップを僕たちで作ろう。 ・市の取り組みを紹介するためのポスターを作ろう。 ・避難訓練だけじゃなくて、もっとみんなが参加したくなるような企画をやってもらえるよう、お願いしてみよう。	・より多くの児童の考えに触れるために、グループごとに広める方法を考え、他グループの児童へ紹介する。（手立て①） ・自分たちの思いを伝えたり疑問をたずねたりするために、安城市危機管理課の方を招く。（手立て②）

５　本時の指導【６年３組】（９／１２）

場所　６年３組教室
指導者　　深津　摩衣

（１）本時の目標

話し合いを通して、巨大地震に対する市の取り組みについて、市民の理解や協力が大切であると気付くことができる。

（２）学びを深めた姿

巨大地震に対する市の取り組みが多くあるが、市民があまり理解していないことに気付いた上で、市民の協力を得るためには自分たちに何ができるか主体的に考えていこうとする姿。

（３）指導過程

時間	学習活動	教師の支援
０	１　学習課題を確認する。 地震に対する安城市の取り組みは十分なのだろうか	・一人ひとりの考えを全体で共有できるようにするために、「十分」「ほぼ十分」「十分ではない」の中から自分の考えに１番近いものに名前マグネットを貼る。
５ ２０	２　全体で学習課題について話し合う。 【十分】 ・アンケートを取ったり、防災活動をしたりしているから。 ・地震が起きたときにどのように対応するのか、細かく決めてあるから。 【ほぼ十分】 ・安城市版帰宅徒歩支援マップなど作っているけれど、見ている人があまりいないから。 ・備蓄食がたくさん用意されているけれど、全員分はないから。 【十分ではない】 ・市民が参加できない日に防災活動をしても意味がないから。 ・市民がやってほしいと思っていることをやっていないから。 ３　どうしたら、市の取り組みが十分と言えるのか考える。 ・防災活動は、地域の人が参加してこそ意味があるんじゃないのかな。 ・市の取り組みはたくさんあるから、多くの人に知ってもらえるといいね。 ・市に頼ってばかりではなくて、自分たちでできることはやったほうがいいよ。	・聞き手に根拠が伝わるようにするために、資料を示しながら発表できるとよいことを伝える。 ・多くの児童が自分の考えを伝えることができるようにするために、必要に応じて小グループで意見を交流する場を設ける。 ・それぞれの考えを視覚的にとらえることができるようにするために、「十分」「ほぼ十分」「十分ではない」に分けて板書をする。 ・市民の協力がなければ十分と呼べないことに気付かせるために、意図的指名をしたり、資料を提示したりする。 ・全員が課題について考えたり、意見を述べたりできるようにするために、小グループで話し合う時間を設ける。 ・全体で共通理解を図るために、意見交流の場を設ける。 ・市民の一員として自分たちができることを考えるために「だれがやるべきか」と切り返しの問いかけをする。
３５	４　ふり返りをする。 ・市民が取り組みについて知ったり、参加したりする必要があるから、呼びかけをしたいな。 ・市の取り組みを多くの人に広めるために、私たちにはどんなことができるかな。	・次時につなげるために、自分たちに何ができるか主体的に考えることができた児童を意図的に指名する。

（４）評価

巨大地震が来たときの市の取り組みについて、市民の理解や協力が大切であると気付くことができたか話し合いの様子やふり返りの記述から判断する。

６　本時の指導【６年１組】（１０／１２）

場所　６年１組教室
指導者　　杉浦　令欧

（１）　本時の目標

これまでの調査活動をふり返り、安城市の災害への取り組みや自ら考えた震災への取り組みを話し合い、自分なりの取り組みを発表することができる。

（２）学びを深めた姿

これまで学習したことをもとに自分ができることを考え、取り組もうとする姿。

（３）指導過程

時間	学習活動	教師の支援
０	１　学習課題を確認する。 南海トラフ巨大地震に備えて自分たちにできることを考えよう。	・これまでの授業の足跡を確認し、学習してきた足跡をふり返る時間を取る。
７	２　グループごとに地震に備えてできることを話し合う。 ・ハザードマップはあったけれど、家の人もあまり分かっていなかったから、多くの人に知ってもらいたいな。 ・わかりやすいポスターを作ってみようよ。	・意図的指名をするために、グループをマップ・イベント・ポスター等の意見ごとに分けておく。 ・根拠をもって話し合いを進めるために、これまでの自分のふり返りや学習の足跡、授業で使ってきた資料を使いながら話し合いを進める。
２０	３　グループで考えた自分たちにできることは何か発表する。 ・地域のハザードマップを作ってみようと思います。 ・アクションプランを見直して、僕たちでも参加できる防災イベントに参加していきたいと思います。 ・避難所に避難するときはどこに避難するのか、経路はどうするのか、家族で話し合っておくことが大事だと思います。	・各グループで考えた取り組みを発表するためにホワイトボードを配布し、広めたい取り組みを記入していくよう指示する。 ・問題点を明確に話せるようにするために、ハザードマップやアクションプランを掲示しておく。 ・出てきた意見を分かりやすくまとめるために、分類して構造的に板書する。
３５	４　市役所の人の話を聞く。	・危機管理課の方に各グループを回ってもらい、それぞれの意見を聞いてもらう。
４０	５　ふり返りをする。 ・市役所はたくさんの取り組みをしてくれていることが分かったので、もっと知ってもらえるために、ポスターを作りたいと思いました。	・話し合いを通して具体的にやってみたいと思ったことや新たに発見したり気づいたりしたことについてふり返るよう助言する。

（４）評価

これまでの調査活動をふり返り、安城市の災害への取り組みや自ら考えた震災への取り組みを話し合い、自分なりの取り組みを発表することができたか、発言内容やふり返りの記述から判断する。